

「杯の内側を清く」-マタイによる福音書講解説教95-

ホセア書  
マタイによる福音書

第6章 4節～6節  
第23章 23節～28節

説教 岡村 恒 牧師

主イエス・キリストはこの日どうしても我慢がなりません。偽善な律法学者、パリサイ人たちが神の言葉をわかっていないということに、我慢がならなかったのです。「マタイによる福音書」23章23節以下はこのことについて述べています。

彼らはどこかで神の御心から離れていっているのです。「神の約束」と言いながら、実は人間のきまりが人間を神から離していっているのです。そして、これは私たちも陥るかもしれない誤りです。

主イエス・キリストは、私たちが神に従おうとしても従いきれない罪深い存在であることをご存じでした。使徒ペテロも一番肝心な場面で主イエスから逃げ出したのですが、このペテロのような弱さを私たちも持っているわけです。

収穫の10分の1を神に捧げるべきであるという律法に関して、律法学者、パリサイ人たちは、はっか、いのんど、クミンなどの薬味（香辛料）についてもその10分の1を納めるべきだと言いました。しかし、神は「いつくしみを喜び、犠牲を喜ばない」（ホセア書6章6節）のです。主イエスは、律法学者、パリサイ人たちがこのことに気づいていないとおっしゃろうとなさったのです。

本来神に捧げるべきものとは、10分の1納めればよいというようなものではありません。私たちの持つもののすべてが神から与えられたものであり、そのことへの感謝の具体的な現れが10分の1であるにすぎないのです。

この点において、律法学者、パリサイ人の理解には大切なものが抜け落ちています。信仰の核心部分が抜け落ちているのです。大切なものが抜け落ち、周縁的なものにとらわれているのです。これが「ぶよはこしているが、らくだはのみこんでいる」（24節）ということなのです。

私たちそれぞれの中にも律法学者、パリサイ人の姿が現れることがあります。その姿になったとき、小さなことには気がつくが、本当に神に喜ばれることが何であるかがわからなくなります。神

と一緒に生きればよいのに、全くそうでないものに支配されているのです。使徒パウロはそれを罪と死と呼びました。

主イエスは、罪の奴隷となった人間を解放するために、地上にお越しくださり、十字架上で死んでくださいました。人間を偽善的なものから解放して、神に従って生きるようにしてくださったのです。

律法学者、パリサイ人たちは、よこしまなものは外から来ると考えていました。ですから、杯の外側をきれいにしようとするのです。しかし、「内側は貪欲と放銃とで満ちている」（25節）のです。神はその内側までご存じです。宗教改革者はこの神の全知に畏れを抱いていました。そして、自分たちの内側にある欲望から解放されたいと願いました。

私たちは神の恵みによってはじめて清くしていただけるのです。大切なのは、巡礼や捧げ物より、魂の内側から神によって洗い清められることです。私たちが神の目に美しい姿に見えるものになるために、主イエスは十字架上で死んでくださったのです。

主イエスは「杯の内側を清くしなさい」とお命じになったものではありません。それは私たちにはできないことです。神がそうしてくださると主イエスはおっしゃったのです。そのために主イエスはご自身の肉と血潮を差し出してくださいました。

主の食卓である聖餐礼典のパンとぶどう液にそれぞれ表される肉と血潮は、私たちの魂の奥底まで主イエスによって清められた証拠です。代々の教会は、主の食卓を囲む礼拝を生活の中心にしてきました。神の目に高価で尊い存在として受け入れられるものとなることを聖餐礼典で確認してきました。そして、罪の赦しの洗礼は、私たちを内側から清めて神のものとするものなのです。それが聖書に書かれた確かな救いの約束です。

（記 説教要約奉仕者）